

氷川先生はオタク彼氏がほしい。1時間目

篠宮 タ



ファンタジア文庫

2891



氷川先生はオタク彼氏がほしい。

O T A K A R E
!! --- P L E A S E --- !!

1 時間 目

口絵 本文イラスト 西沢5ミッ

「いい加減、静かにしてください」

プロローグ

高校一年生の春。

入学式。

新たな門出^{かどで}により心を躍^{わど}らせているであろう新人生の前で、彼女がそんな冷たい声を響^{ひび}かせたのは今でもはっきりと覚えている。

壇上^{だんじょう}に立っていたのは、一人の女性教師だった。

一つにまとめられた黒髪^{くろかみ}。

黒縁^{くろぶち}の眼鏡をかけた姿は真面目^{まじめ}そうな印象を与え、その奥からは鋭い眼光^{えんこう}が見え隠^{かく}れる。格好は黒のスーツで、かなりお堅^{かた}い印象。

美人なんだろうけど、その雰囲気^{ふんいき}は刺々^{とげとげ}しさと冷たさを掛け合わせようなもので。

ぐるりと、その女性教師は体育館中を眺^{なが}め回して言う。

「先程^{さきほど}から、みなさんのことを見ていましたが——私語^{しご}が非常に多いです。それに、隠れ

て携帯けいたいを弄いじっている方もちらほらと見受けられます。今は入学式中です。みなさんが好き勝手にしている場ではありません」

「——今後、小学生でもできることを指摘しきされないように気をつけてください」

そんな、当たり前だけれど——厳しい言葉とともに、俺の高校生活は幕を開けた。後から聞いたが、そのひとは〈雪姫ゆきひめ〉と揶揄やゆされる女性教師で。うちの高校ではとびつきり厳しくて怖こわい先生のようなだった。

それ以来、俺は……というか、俺たち新入生は、〈雪姫〉に苦手意識を持っている。

第一章

人間、努力なんかじゃどうにもならないことはあると思う。

どれだけ努力を重ねても、越えられない壁かべというものがあるというか。

一言でいうなら、それは「才能」ってやつで。もつと範囲はんいを拡大するなら、それぞれの人間には「出来ること」と「出来ないこと」があるんじゃないかと思ってしまう。

そうなると、俺みたいな凡人ぼんじんにとつて、人生で一番大切なのは、自分の「出来ないこと」を見極めることみきわめることで。さらに、「出来ること」に焦点しやうてんを絞しぼって、効率良く時間を使っていくことが大切なんだと考えてしまう。

時間は有限だから。

だから、「出来ないこと」には時間は使わない。

もつと、有益なことに——自分もつと楽しめたりすることに、時間を使うべきだ。そうするのが、俺は賢い生き方だと思う。

ただ、だからといって、自分の「出来ないこと」が出来た人たちに憧あこがれないかと言ったら、それとこれとは話は別で。

つまり、何が言いたいかというと。

「……………ああ、彼女欲しいなあ」

高校一年生の春休みが、あと一週間と近づいてきた頃。

俺が自転車を押しながら傾斜のきつい坂を登っていると、学生カップルが二人乗りで颯爽と駆け上がってきた。電動自転車なのか一漕ぎすることにごんぐんと登って、俺をあとという間に引き離していく。

それを見て、羨ましいとは思うけれど……もちろん、彼女をつくることなんて、自分には到底無理だとわかつている。

何故なら、俺のステータスを挙げるとこんな感じだからだ。

【名前】霧島拓也／【職業】学生（高校一年生）／【見た目】やや茶髪（生まれつき）。身長は平均よりやや高め／【備考】オタク

さらに、生まれつき「目つきがちょっと悪いらしい」というデバフ持ち。

一言でいえば、俺は漫画に出てくる三下の不良みたいな見た目をしているということだ。そして、そんな奴の扱い方なんて、だいたい一つに絞られてくる。

クラスでは浮き、ペアを組まされる授業では必ずと言っていいほど余り物。

近所を歩きながら幼児と目が合うと、泣かれることもしばしば。

そんな——はじまりの街から、デバフどころか、呪いの装備を強制的につけさせられた状態では、NPCにも魔物にも逃げられっぱなしでクエストも碌に進むわけがない。

当然、彼女なんて夢のまた夢。

誰かと仲良くなるのも、会話イベント自体が発生しない以上、もちろん無理難題。

だから、さっきの理論から言うのと、彼女をつくることなんて諦めて——自分の「出来ること」に集中するべきなんだろうけど。

でも、俺は自分の心に素直になるなら、彼女が欲しくてたまらない。

理想を言ってもいいなら、美人で可愛い彼女が。

そして、当然、オタク趣味を共有できる彼女が。

放課後にはアニメショップに行ってお互いのおすすめのラノベを教え合ったり。休日にはどっちかの家で一緒にぐだぐだアニメ鑑賞をしたり。それから、長期休暇にはちよつと遠くに聖地巡礼に行ったり。

まあ、もちろん、そんなの身の程を弁えてない夢ってことはわかっているけど。

それでも、もし、こんな可愛い女の子が彼女だったらなあ……などと、夜な夜な布団の

中で妄想してしまっているのが現実で。

そういうわけで、今日も今日とて、俺は本日発売のラノベを買うために自転車に乗って本屋さんへと向かっていった。

……いや、何が「そういうわけで」かは自分でもさっぱりわからないけど。彼女が欲しいと思ってるなら、少しは努力しろって話だけど。

でも、こればかりは仕方ない。昨日の夜から、新刊のラノベが気になりすぎてそわそわしていたぐらいだし。それに、それこそ『出来ないこと』なんだから、俺が努力したって無意味だろうし。

「ふう、っ……」

住宅街のなかにある傾斜の大きい坂を、俺は自転車を押したまま登り終える。

すると、この街——慶花町の風景が一望できた。

慶花町は、横浜駅から地下鉄で数十分ほど行っただ先にある街だ。これと言って大きな特徴もない街だが、しいて挙げるとしたら「坂」が多いことぐらいだろうか。あと、横浜なのにこれっぽちも海が見えないところとか。

坂ばかりの景色を眺めながら、俺は自転車に跨がる。それから坂を下っていった。十分後。

俺は無事に新刊のラノベを買うことに成功していた。

さて。これから大雨になるって予報だったし、さっさと帰るか。このラノベを一秒でも早く読みたいという気持ちもあるし。

俺は急ぎ足で本屋さんの駐輪場まで戻って——

「っ」

俺は、そのひとに目を奪われてしまった。

本屋さんの前にある歩道橋。

その階段を、女の子が大きな紙袋を抱えて上っていた。

それだけではなく、彼女は両腕にそれぞれ紙袋を吊っている。しかも、紙袋にはさっき俺が行ったばかりの本屋さんのロゴ。……ってことは、あれ、もしかして全部本なのか？

でも、俺が目を奪われたのはそれだけが理由ではない。

その女の子が、今まで見てきた中で一番と言つていいほど可愛かったからだ。見た目の年齢的には、だいたい同じぐらいか一つ上の先輩ぐらい。

艶やかな黒の長髪。優しい瞳。

重い荷物を抱えているためか、彼女の視線が僅かに下に向き、はらりと乱れた髪によって顔が隠されていて。だが、黒髪の隙間から窺える横顔は、はっと息を呑むほど美しい。胸元は服の上からでもわかるほど膨らんでおり、ブラウスは魅惑的な曲線を描いていた。ロングスカートは落ち着いた淡い色合いで、全体的に清楚そうな印象を与える。

……うわつ、すげー綺麗で可愛い女性。

あんな美人と付き合えたら、さぞかし毎日が楽しいんだろうな、と思う。

もちろん、絶対に無理なのはわかってるけど。

よししょ、よししょと、重そうな紙袋を持ってゆつくりと歩む彼女。

牛歩で、歩道橋の階段を上ろうとしている。けど、

……あれ、大丈夫か？

あんな薄そうな紙袋にたつぷり本を詰めてたら、破れるんじゃないか？　この本屋さ
んで紙袋を使うほど本を購入したことがあるけど、そのときにも呆気なく破れたし。

と、そんなことを思っていると。

びり。びり、びりいいいいいいいっ！

案の定、盛大な音を立てながら、紙袋が裂けた。

同時に、何冊もの本がどさどさどさと地面に落ちてしまい、階段をころころと転がり落

ちて歩道まで行ってしまう。

だけれど、それだけではなかった。

目の前の歩道に、ビジネスマン風の通行人が現れる。されど、その耳にはイヤホンが
ついていて。その男はチラッと歩道橋の女の子に視線を放るが、そのせいで足下の本には
気づいていない。そのまま、泥だらけの靴が本を踏もうとする。

しかし、彼女は距離的に間に合うはずがなくて。

「――、――」

ほんの、ほんの一瞬だけ、彼女の顔が僅かに歪む。

刹那。

気がつけば、俺の身体は動いていた。

鞆を地面に落として駆けていくと、俺はギリギリのところで本を拾う。

しかし、そのせいで、ビジネスマン風の男にぶつかりそうになり――舌打ちとともに睨
まれてしまった。だが、俺の顔を見た途端、その男性はそそくさと足早に去っていく。

……あつ、これ、俺を怖がったやつですね。

こうやって怖がられるのは、慣れるから別に構わないんだけど。だからといって、傷
つかないわけでもない。……俺、やっぱりそんなに怖い顔をしてるんですかね。

「あ、あのっ。すみません、本当にありがとうございますっ」

「い、いえ、気にしないでください。大したことはしてないんで」

「そんなことはっ。本当に助かりましたから。あの、ありがとうございます」
階段を降りてくると、ぺこぺこ何度も頭を下げる女の子。

彼女が顔を上げると、その表情はあからさまに安堵あんどしていて。そんなに大したことなんてしていないつもりなのに、ここまで感謝されると何だかむず痒がゆくなる。

「あっ、俺も拾うの手伝いますね」

「えっ、そこまでしていただくなくても——」

「ほ、ほんと気にしないでくださいっ。ただ、俺がやりたいだけなんであっ」

それに、流石さすがにこのまま見捨てていくわけにもいかないし。

俺が精一杯せいぐんの笑顔えがほでそう返すと、屈かがんで他の本も拾い始める。……あーあ、やっぱり砂とかでちよつと汚よごれてるな。可哀想かわいそうだけれど、こればかりは仕方ない。

本を拾っていると、タイトルが不可抗力で目に入ってしまう。

落ちていた本は、どれも大学受験向けの国語の参考書ばかりだった。このひと、もしかして先輩なのか？ この春に、大学受験向けの参考書を買ってるってことは、来年度から高校三年生が浪人生ろうじんなのかも。

俺は拾い終わると、彼女——先輩に手渡す。

「え、えつと……これ、どうぞ」

「あつ、ありがとうございます。本当にとっても助かりましたっ」

ほつと、息を吐はき出す先輩。

大事そうに本を抱え、そのせいでそれがむぎゅつと柔やわらかそうに形を変える。

なんか、目のやり場に困る……どこがとは言わないけど。

と。

俺が慌あわてて視線を逸そらすと、紙袋が視界に入った。

そこには、先程さきほど拾った本がちよつと雑に置かれてあつて。よほど急いで詰め直したせい
か、少し表紙が曲がつてしまっていて。

——可愛い女の子がM字開脚かいきゃくしているイラストがばっちり見えていた。
というか、俺がよく知ってる肌色はだいろが多めのラノベの挿絵さしえだった。

「っ」

「あ、あのっ、それはね、そのっ」

俺の視線に気づいたのか、かああああと顔を染める先輩。

まさか、挿絵が思いっきり見えてる状態とは思わなかったんだろう。

でも、他人に自分が読んでいるラノベを見られたくないってのはよくわかる。

やっぱ、そうだな。こう言ってはなんだけど——大半のラノベって、人に見せるのって結構勇気が必要な気がする。相手がオタクなら全然いいんだけど。

「あの、こ、これはね、違うのっ」

先輩は頬を赤らめたまま、紙袋を自分のお尻の方へと隠した。よほど慌ててるのか敬語ですらなくなっている。

彼女は視線を明後日の方向に向けながら、ぼそっと。

「あ、あの、これはね、その……………おじいちゃんに買ってきて言われたの」

「異世界転生エロ系ハーレムラノベを!? おじいちゃんがですか!?!」

「う、うん。そうなの」

俺が驚愕すると、先輩はこくこくと頷く。

「なんかね、最近、妙にハマっているみたいで。この間なんて、病院のベッドで『早く転生しないかなあ』って言ってたぐらいだし」

「発言が意味深すぎませんか!?!」

「あと、急に農作物の育て方とかを調べ始めたり」

「明らかに知識チートする気、満々じゃないですか!」



「部屋で魔法っぽい何かを唱えてる姿とか見るんだけど、黙ってた方がいいかな？」
 「それはそうですね！　ってか、高齢になっても現役の厨二病ってむしろ凄いですね！」
 「あと、それから……それから………うん、流石

にこの嘘は無理あるよね。ははっ（死んだ目）」

「きゅ、急にどうしたんですかっ？」

「ご、ごめんね、なんか茶番に付き合わせちゃって。わかっていただろうけど、全部嘘なの。この本も、私が私のために買ったの。……引く、よね？」

薄っぺらい引きつった笑みをつくって、ずーんと落ち込む先輩。

ラノベのことは知られたくなかったのか、死んだ目をしている。メンタル弱すぎるだろう。でも、さっきも言った通り、嘘をついてしまふ気持ちもわからなくてはなくて。

だから、俺は慌ててフォローするように言う。

「ひ、引かないですよ。俺もこのラノベ全巻持ってますし。えっと、上手く言えないんですけど、このシリーズいいですよね」

「えっ？　さっきので、もしかしてとは思ってたけど……君もこういうの読むの？」

「はい、その……俺もオタクなんです。ラノベは割と読む方だと思えます」

「そ、そうなんだ。それなら、慌てて隠したりする必要もなかったのかな。あはは」

照れ臭そうに笑って誤魔化す先輩。

その笑顔に、思わずドキリと胸を高鳴らせてしまう。……くっそ、可愛いなこのひと。

そこで、ふと、俺はあることが気になってしまう。

「あ、あの。そういえば、本、大丈夫ですか？　ここから運べますか？」

「あー……えっと、多分大丈夫かな。私、慶花町の駅の辺りに住んでるから、ちよつと遠いけど。でも、こう見えて、私、結構筋肉あるから」

「えっ。そ、そうなんですか？」

「あつ、疑ってる？　本当だよ？　私、意外と力持ちなんだから。ほら」

可愛らしく力こぶをつくってみせる先輩。

だけれど、その腕は華奢で白い肌で。うん、このひと完全にインドア派だ。何故わかるかっていうと、俺も似たようなものだから。

でも、慶花町の駅辺りって……俺の家の近くじゃないか？

あの辺まで行くとなると、すぐ近くにある傾斜のキツイ坂は絶対に登らなきゃいけない。それに本もこの量だ。どう考えても、これは女の子一人で運ぶ量ではなくて。

俺は恐る恐る提案する。

「……えっと、もしよかったら俺も運ぶの手伝いしましょうか？　俺、同じ方向ですし、自

転車持つてゐるんで」

「えっ？ 正直、それはありがたいんだけど……でも、そこまでしてもらうなんて」

「大丈夫ですよ。俺、その、暇（ひま）なんで」

「で、でも——」

流石（りき）に、これ以上迷惑（めいわく）をかけるのは気が引けるとでも考えているのか、先輩（せんぱい）はゆるゆると首（くび）を振（ふ）る。

そのとき。

遠く（とほく）の空（そら）が、急にピカッと閃（ひらめ）いた。先輩（せんぱい）がびくびくと身体（からだ）を震（ふる）わせる。それから、かなり長い間の後（のち）、ゴロゴロと雷（かみなり）が鳴（な）り響（ひび）いた。

「あ、そういうや、大雨（おおあめ）が降（ふ）るんだっけ……」

天気予報（てんきよほう）では数時間（すうじかん）後（のち）って話（わ）だったけれど、もしかしたら早（はや）まっているのかもしれない。ということは、この本（ほん）を運（は）ぶのに長い時間（じかん）はかけていられないというわけ。

先輩（せんぱい）は未だ（いま）何故（なぜ）か怯（おび）えた表情（へいしやう）を見（み）せながらも、僅（わずか）かに逡巡（しゆんじゆん）する様子（ようす）を見（み）せた後（のち）。おっかなびつくり言（い）ってくる。

「あ、あの。やっぱり頼（たの）ませてもらってもいい……かな？」

そうして数分（すうぶん）後（のち）には、俺（おれ）たちは慶花町（けいかちょう）の駅（えき）方面（へいめん）に向（む）かって歩き始（は）めていた。

破（か）れた紙袋（かみふくろ）は、既（すで）に本屋（ほんや）さんで取（か）り替（か）えてもらっていた。それら（それら）を自転車（じてんしゃ）のカゴ（かご）に入（い）れて歩きながら、二人（ふたり）で心臓（しんざう）破（やぶ）りの坂（さか）を登（のぼ）っていく。

……それにしても、このひと、全然（ぜんぜん）俺（おれ）のことを怖（こわ）がってる感じがしないような。

チラツと隣（となり）を見（み）るが、先輩（せんぱい）はどこか楽（やす）そうにしているだけで。なんか、個人的（個人的）にはすげー新鮮（しんせん）な気（き）分（ぶん）だ。

「……で、えーつと、君（きみ）は他（ほか）にはどんなラノベ（ラノベ）を読（よ）んでるの？」

俺（おれ）は先輩（せんぱい）と一緒に歩（ある）いていたが、結局（けつぎゆく）、話（わ）すのはラノベ（ラノベ）のことだった。

でも、正直（しじき）に言（い）うとあ（あ）りがたい。他（ほか）の話（わ）題（だい）だと、何（なに）も喋（しゃべ）れないし。かといって、初対面（しゅたいめん）の人（ひと）と無言（もくごん）状態（じょうたい）は辛（くる）すぎる。

「え、えつと、よく読（よ）むのはラブコメ（ラブコメ）だったり青春（せいしゆん）モノ（モノ）です。『ゲームーズ！』、『青春（せいしゆん）ブタ野郎（やろう）シリーズ』、『俺（おれ）ガイル』、『弱（よわ）キャラ（キャラ）友崎（ともさき）くん』、『エロマン（エロマン）ガ先生（せんせい）』と、か……」

言いながらチラツと隣（となり）を見（み）てしまうと、先輩（せんぱい）とはつちりと目（め）が合（あ）ってしまっ（ま）った。それだけで、言葉（ことば）がなくな（な）ってしま（ま）う。

どれだけ喋（しゃべ）り慣（な）れてないんだよ……と自分（自分）を情（なさ）けなく思（おも）ってしま（ま）うけれど、これはっか

りは仕方ない。普通の^{ふつう}の人ならまだしも、相手は先輩で、しかも超美人^{ちやう}。

俺みたいなぼっちオタクには、目を合わせて会話するなんてハードルが高すぎる。

けれど、気にした様子もなく、先輩は楽しそうに口元を綻^{ほころ}ばせながら。

「あつ。今出たシリーズ、私も全部読んでるっ。どれも良かったんだけど……最近だと、特に『青ブタ』はぐさつと刺^ささつちゃったかな。巻数が進むごとに、どんどんと笑わされて感動させられて。その……電車の中なのに、いっぱい泣いちゃったりもしたし」

「え？」

「あつ、いや、ま、毎回じゃないよ？ ただ、巻数を重ねるごとに、その、どんどん感情移入しちゃって……は、ははっ。気持ち悪い、よね？」

「いえ、逆です！ わかります超わかります！ 俺も読んで、超泣きましたし！ あと舞台^{ぶたい}が江ノ島あたりとか近場だったんで、思わず行ってみたりとか！」

「あつ！ それ、私もした！ キャラたちがここを歩いてるんだなあーって思ってた歩くと、とっても楽しいよねっ」

「ちなみに、誰^{だれ}が好きですか？ 俺は先輩派です」

「私は、そうだな……迷うけど、やっぱり理央^{りお}ちゃんとか後輩ちゃんとかかな」

「あー、その二人もいいっすよね！」

ほんと、あのラノベに出てくる女の子はなんであんなに可愛いんだろうな。

あーあ、俺の現実にもあんな可愛い先輩がいたら、もって頑張^{がま}れるのに……

「ふふっ」

軽い現実逃避^{とうひ}をしていると、先輩が不意に小さく笑った。

いったい、どうしたんだろう？

俺の視線に気づいて、先輩は頬を染めてぶんぶん手を振る。

「えつと、なんかごめんね。ラノベについて喋ったのが久しぶりだったから、その、凄く

楽しくて……へ、変だよね？」

「いや、俺も似たような感じで……その、俺も喋るの楽しいですし」

普段^{ふだん}、こんなことを喋れる友達がいなかったから、まさにそれは本音そのもので。お互い^{たが}に顔を見合わせると、ふっと小さく微笑^{はほ}笑んで。

「じゃ、もう少しラノベについて喋ろっか」

「はい、ぜひっ」

につこりと笑って、俺は大きく頷く。

それから、俺たちはラノベについて話し始めて。

十数分後には、すっかり意気投合してしまっていた。

先輩なんて最初の方からだけど、すっかり敬語が抜けていて。なんだか妙に距離が近づいたようにも思えて嬉しかった。

まあ、俺は相変わらずの敬語だったけど。でも、明らかに先輩ってわかってる女性に敬語で喋らないのも気持ち悪いし。これはこれでいいんだろう。

気がつけば、俺たちは坂を乗り越えていた。

もう少して、俺の家の近所だ。

ということは、先輩の家も近づいてきたってことで。

出来れば、家のそばまで運んでいつてあげた方がいいんだろうけど……今日出会ったばかりなのに、家まで行くと正直キモいよな。怖いと思われるかもしれないし。

迷った末に、俺は正直に話してみる。

「あの。実は、俺の家、もう少し先にあるあの信号の近くのマンションあたりで」

「えっ？ あつ、その……私の家も、あの信号あたりなんだけど」

「えっ？」

驚いて、先輩を見る。

よく聞いてみると、先輩の家は道路を挟んで反対側にあるマンションらしかった。マジかよ。まさか、ご近所さんだったなんて……こんなことであるんだな。

最近では、隣に誰が住んでいるか知らないことなんてザラにあるから、俺が先輩のことを知らなくてもおかしくはないだろうけど。

でも、向かいに住んでるなら、制服姿ぐらい一回は見ていてもおかしくないのに。

まあ、大方、学校に向かう時間が全然違うんだだろうけど。

そうしているうちに、俺たちはマンションの近くまでやってきて。

「あの、本当にありがと。多分、私一人じゃ運べなかったから、とっても助かった」

「いえ、気にしないでください。結局、道も変わらなかったんで」

なるべく先輩が気にしないように、俺は精一杯の笑顔をつくってみせる。

でも……これで、この先輩と話すのも終わりか。

そう思った瞬間、じくりと心が痛んだ。

俺は学校でもぼっちだから。オタク友達はおるか、友達すらいないから——ラノベについてこれだけ話したのは初めてで。

だから、なんというか、この先輩ともう少し話したいと思っていて。

それに、下世話ではあるけど、凄く可愛いからもう少し一緒にいたいとも思っていて。そして、あわよくば連絡先も交換できたらなとも思っていて。

……だけど、やっぱり無理だよな。

俺と先輩は、結局のところ他人で。

学校も（たぶん）同じじゃないし——接点なんて、これ以外何もないのだから。

そうして、お互いの間に別れの霧^{ふんいき}囲^き気が流れたそのとき。

「あ、あのつ、えーつと……そ、それでね」

不意に、先輩が頬^ほを赤く染めながらもごもご切り出した。

どうしたんだろう？ そう思っていると、先輩はくるくると黒髪^{くろかみ}の先を手で弄^{いじ}りながら、

チラッと視線を向けてきて。

「あの、私、ラノベとかについて話せる友達が少なくて……だから、そ、その、もう少し君と話せたらなって思ってた」

「えっ？」

「そ、それに、そう！ 今日とはたくさん助けてもらったからっ！ だから、今度、君にお礼もしたいと思ってるんだけどっ」

「その……連絡先の交換とか駄目^{だめ}かな？ もちろん、嫌^{いや}じゃなかったらでいいんだけど」

先輩のその発言に。俺は言葉を失ってしまった。

え、えっ？ ちょ、ちょっと待った？ いったい、何が起こってるんだ？

だけれど、それを拒否^{きひ}する理由は当然のようになって。

「い、嫌^{いや}ってことはないですけど……」

俺が躊躇^{ためら}いながらも了承^{りやうしやう}すると、先輩はパッと笑顔を輝^{かがや}かせる。

そこからは、早かった。

先輩はオタオタとしながらも、すぐさまスマホを取り出すとQRコード画面を出して。

……交換、してしまった。

俺のスマホ上には、先輩のLINEのアカウントが表示されていた。

だけれど、彼女曰^いく『本名』であるという名前を見ても、いまいち実感が湧^わかなくて。

「じゃ、その……後日、また連絡するね」

「あつ、は、はい」

「それじゃ——またね、霧島^{きりしま}くん」

最後に微笑みながらそう言くと、彼女は紙袋^{かみ}を抱えてマンションに消えていく。

それでも現実感^{いざみ}は未だにないままです。お約束のように頬^ほを抓^{つか}ってみるが普通に痛くて。

当たり前のように、彼女の——『氷川^{ひがわ}真白^{ましろ}』と書かれたアカウントは、いつまで経^たつても消えることはなかった。

第二章

トーク画面にて。

【氷川真白^{ひかわましろ}】 え、霧島^{きりしま}くんも一人暮らしなの？

【霧島拓也^{きりしまたくや}】 も、つてことは、えっ、もしかして氷川さんですか？

【氷川真白^{ひかわましろ}】 うん。ちょうど一年前ぐらいから、一人暮らしかな。

【霧島拓也^{きりしまたくや}】 へえー。奇遇^{きぐう}ですね、俺もちょうど一年前ぐらいからなんで同じですね。

【氷川真白^{ひかわましろ}】 えっ、そこも同じなんだ。でも、一人暮らしだとご飯は面倒^{めんどう}だよな。

【霧島拓也^{きりしまたくや}】 はい、そうなんです。ご飯はつくったほうがいいんですけど……中々できてなくて（笑）。ご飯だけ炊^たいて、おかずに惣菜^{そうざい}を買^かってる感じです。

【氷川真白^{ひかわましろ}】 あっ、それ、とってもわかるかも。私もご飯をつくっているんだけど……やつぱり、面倒になることも多いよね。一人分だと、割高になっちゃうこともあるし。

【霧島拓也^{きりしまたくや}】 そうですよ。結局、たくさんつくることになりそうですし……こういうの体験すると、ラノベ主人公^{すべ}ってやつば凄いと思います。だって、あいつら当然のように

自炊^{じさい}やつてるんですよ？ 基本、惣菜とか買^かってないんですよ？

【氷川真白^{ひかわましろ}】 しかも、妹の分までつくったりしてるし……

【霧島拓也^{きりしまたくや}】 そうそう。やっぱ、ラノベ主人公^{すべ}って基本的にハイスベックですよな。

【氷川真白^{ひかわましろ}】 あっ。話は戻る^{もど}るんだけど、もしよかったら――

氷川真白がメッセージの送信を取り消しました



……なんだっただろうな、あれ？

昨日の夜に、送られてきたメッセージ。

俺はLINEのトーク画面を開いてそれを見ながら、首を捻^{ひね}った。

スマホのスリープ画面にメッセージがポップアップされて、途中^{ちゅうちゆう}まで読めたのは覚えてる。だけれど、アプリを開くと、取り消されているし……ほんと、なんだっただんだ？

凄く気になってしまっ。

いったい、氷川さんは何を言おうとしたんだろうか？

もしかして、もう連絡を取り合うのは止めましょう……とかか？

だとしたら、俺、なんかやつちやつた!? えっ、どんなの送ったんだったつて!!

たった一つの（ただしシステム上の）メッセージに対して、必要以上に『裏』を勘ぐってしまつて過去のやり取りをスクロールして見返す俺。

あれから、一週間が経過していた。

あの後——改めて、氷川さんからはLINEでお礼を言われていて。

そこから、俺たちは毎日のように雑談を延々と続けていた。

まあ、そうは言っても、一日に数往復するレベルだけど。

でも、やっぱり氷川さんと話すのは楽しくて……そして、それ以上に心臓が痛かった。

いや、だってさ、仕方ないだろ？

この年になるまで、女の子とLINEなんてほとんどしたことないし。そういうのとは無縁の世界で生きてきて、急にそんな機会が来ても出来るわけがない。

しかし、そんな弱音を吐いたところでどうにもならなくて。

ネット上に大量にある『女の子と上手にLINEするための十の心得』みたいな記事を参考にしながら、書いては消して。書いては消して。何度も推敲しながら、ようやく辛うじて満足のいくものができたときには、もう何時間も経っていて。

だが、メッセージを送信した後は、その比じゃない。

はつきりと言うが——氷川さんからのメッセージを待っている時間は、生きた心地がない。たとえるなら、あれだ。死神の鎌を首にずっと突きつけられている気分。

しかも、待つ時間が長いと「何か、変なこと送ったかも……」と何度も自分が送ったメッセージを見返して、反省して死にたくなって。

そんなときに、スマホが振動して来て届いたのが、企業LINEだったときの憎悪と来たらもう！ ふざけんな！ 紛らわしいタイミングで送ってくんじゃねえ！

そうして、やっと届いてホッとしたと思つたら、今度は氷川さんに送るメッセージを考え——以下、エンドレスである。

正直に言うなら、ちよつと疲れてしまった。

でも、世のリア充とか陽キャとかは、こんなこと平然とやってんだもん……あいつら、本当に凄いな。どれだけ心臓強いんだよ。

だけど、同時に理解できてしまう。

こんなことをするのは、やっぱり、氷川さんとの会話が楽しいからで。

……うん、ここまでくれば白状するが、俺は氷川さんのことが気になっている。

まだ、その感情に名前がつけられるほど確かなものではないけれど。でも、やっぱり彼

女が普段何をしているのかとかが気になってしまふのは事実で。

たった十数通のメッセージがこんなにも心を惑わせるものとは、俺は知らなかった。

まあ、俺、その楽しいものを、ぶち壊しちゃったかもしれないんですけどね……

あー!? 俺、もう本当に何かしたのか!?

あの文面から悪い言葉が来るとは考えにくいけど、あー、でも、すげー気になる!

「——それでは、次は生徒指導の先生からのお話です」

男子生徒の声が響く。

それで、俺の意識は一気に現実に戻された。

現在、俺がいるのは高校の体育館。終業式の真っ最中だった。

……いや、そんな時に、スマホなんて見てんじゃねーよと思うかもしれないが、これはあれだ。それぐらい、氷川さんのことで頭がいっぱいだったのだ。

だが、そんな風に、心ここにあらずな状態なのは俺だけではない。

明日から春休みだからか、周囲の同級生たちも心なしか浮き足立って見える。

隠れながらLINEでやり取りしたり、もっと直接的に隣や後ろの生徒と喋ったり、と

にかくやりたい放題だ。だが、

「っ」

その女性教師が壇上に上がった瞬間、その弛緩した空気が引き締まった。

雪姫、だ。

直後。黒縁眼鏡の向こうから、睨みつけられているような感覚に襲われた。

これが、ポケットなモンスターのゲームなら防御が一段階下がっているところだ。対象は、この体育館にいる全員。なにそれ、強すぎんだろ。

しかし、実際、多くの生徒が大人しくなり始めた。

まあ、それも無理もない。だって目をつけられたくないし。

特に、俺なんて、この見た目も相まって素行が悪い生徒ということになっている。

そんな状況で、リスクのある行動は取りたくないかった。

俺も周りに倣って制服のポケットにスマホをしまうと、雪姫と視線を合わせないように

顔を俯かせてしまふ。

それから、雪姫の話が始まるが——正直、話なんて何も入ってこなかった。下をずっと向いたまま、ただひたすらに苦行が終わるのを祈るばかりだ。

……でも、雪姫って二年生の担任になるかもしれないんだよな。

もし、それが本当なら嫌すぎる。ただでさえ、俺は目をつけられやすいのに、雪姫が担任なら何を言われるかわかったまんじやないし。

「――それでは、終業式を終わります」

などと考えているうちに、雪姫の話は終わって終業式も幕引きとなった。

生徒がぞろぞろと自分のクラスへと帰り始める。

その表情は、安堵あんどしたような、明日から始まる春休みへと期待するような感情に染められている。雪姫に水を差されてしまったが、しかし、春休みへの期待感はその程度で収まるものじゃなかったみたいだ。

あー、俺も春休みになったら何をしよう。

最近、公開されたアニメ映画も見に行きたいし、ゲームを徹夜てつやでやるのもいいかも。

FGOをやってから気になっていた、Fateの原作の方をやるのもありだよなあ。Vitaの方なら高校生の俺でもできるし、超面白ちやうおもしろいから楽しめるだろうし。

ヤバイ、考えてたら凄く楽しみになってきた！

マジでさっさと学校終わって、春休みにならないかな――

「おい、霧島。ちよつと待て」

背後からの声。振り向くと、眼鏡をかけた教師が立っていた。

篠原涼真しのはらりょうま。クラスの女子が「少女漫画まんがに出てくるドSイケメン教師」と密ひそかに呼んでいるのを聞いたことがあるほど整った顔を持った、数学教師だ。

それだけじゃなく、俺と昔から個人的な付き合いのある教師でもある。

それにしても、どうしたんだ？

学校の中で、こいつが話しかけてくることなんてほとんどないのに。

「霧島。悪いが、少し時間いいか。お前には一言わなきゃいけないことがあるんだ」

「？ なんすか、篠原先生？」

眉根まゆねを寄せていると、篠原先生は告げる。

俺にとつて、絶望的な一言を。

「いや、お前、留年すれすれだから春休み中は補習ひじゅな」

俺の春休みが消えた。



一時間後。生徒指導室。

終業式により早めに下校が許された中、俺は山のように積まれた補習プリントの前で

黙々と手を動かしていた。

だけど、春休みが消えてしまったせいで、当然ながら全く集中できていなくて。

くそっ！ せっかく、Fateとかスマブラをやり込んだりしようと思ってたのに！

補習のせいで、全部バアじゃねえか！

「つていうか、そもそもなんで俺が補習なんだよ！ 俺、今回のテストでは赤点三つしか取ってないだろ！」

「いや、それが全ての答えだろ」

そう冷静に言ってくるのは、対面の席に腰掛けている篠原先生——涼真だった。

涼真は、中学生の頃にお世話になっていた元家庭教師だ。

当時、涼真は大学生だったが——その後、そのまま教職に就いたのだ。

だが、何の因果か、俺が進学した高校が涼真の職場でもあって。

以来、涼真とはあの頃と変わらない付き合いをしている。

つまり、頭の悪い俺が、涼真に一方的に迷惑をかけ続けるという関係ということだ。

「というか、拓也、悪いのは今回だけじゃなくて前回もだろ？ あんな点数、毎回取ってたらかうなるのは当然だろうが」

「そ、それは……仕方ないだろっ。この高校のテストが難しすぎるんだよっ。クラスメイ

トたちも頭良すぎるし。普通、高校一年生なのに二年生の内容までがつつりやるか？」

「そんなの、受験の時点でわかってただろ」

それはその通りかもしれないが、異議は唱えたい。

何故なら、俺が通う慶花高校は日本有数の進学校なのだから。

同級生たちは当然のように高偏差値の大学を目指し、授業の内容も非常にハイペースで行われる。高校一年生のときに、高校二年生の内容をやるなんてザラ。盗み聞きした噂によると、高校二年生で三年生分まで終了するらしい。

そんな高校では、俺のような何かの間違いで受かってしまったやつは、必然的に落ちこばれになると決まっ

……まあ、それじゃなくても、勉強を一切やらず、帰宅してから日付を越えるまでずっとラノベやアニメに浸かってたら、成績が上がるわけがないのは当たり前なんだけど。

しかも、同級生たちは、明らかにデキが違うと思うほど頭がいいし。

それに比べて、俺は……うん、やつぱ向き不向きであるよな。

前にも言った通り、努力をしても人間としての個体差がある以上、「越えられない壁」っていうのはあるわけで。そこを諦めて、別のところに時間を使って効率良く生きるのも、俺は一つの選択肢だと思う。

別に、国内トップクラスの大学に行きたいわけでもないし。

……そうは言っても、流石に留年は不味いんだけど。

今ですら、クラス内で浮いてしまっているのに。

この上、留年なんかしたら、俺の高校生活は取り返しのつかないものになる。

「それに、拓也はテストの点数だけじゃなくて生活態度も悪かったしな。お前、一年間で何回遅刻したか覚えてるか？」

「そ、それも仕方ないだろうっ！ アニメが豊作だったんだから！ そのせいでキャンプとか筋トレとかもしたくもなるし！ 気がついたら、色々やって深夜になってんだよ！」

「いや、なんで、アニメ見てるだけでキャンプとか筋トレをしなくなるんだよ」

涼真が呆れてくるように言ってくるが……え、そういうもんだよね？ みんな、そうだよな？ 気がついたら道具を買ったり、ネットで長時間調べたりしてるよね？

「とにかく責任転嫁するなよ。そういう行動を取ってるから、一部の生徒からあんな渾名をつけられるんだぞ？ あんな揶揄をされなくなったら、少しは頑張れ」

「……え、ちょっと待って。俺、それ知らないんだけど？ え、俺、裏で何か渾名つけられてんの？」

「あ、いや……」

俺が知らないとは思わなかったのか、涼真がそつと視線を逸らす。

え、えっ？ これマジなやつじゃないの？ 先生が知ってるってことは、相当有名なやつなんじゃないの？ 俺、教えてくれる友達いないから全く知らないけどさ。

え、マジでなんて呼ばれてるんだ!?

まさか、不良っぽい見た目から《狂犬》とか呼ばれてるわけじゃないよね!?

「ちょ、ちょっと待て、涼真！ お、教えてくれ！ 俺、裏でなんて呼ばれてるんだ!？」

「あ、いや、一部の生徒だぞ？ 一部の生徒がそう呼んでいたから、広まっているわけじゃないだろうが」

そう前置きすると、涼真は憐憫の眼差しとともに言ってくる。

「——俺が聞いたのだと、《劣化版・一昔前のラノベ主人公》って呼ばれてたな」

「的確すぎて、ぐうの音も出ねえよ！」

なんて嫌な渾名なんだ！

確かに、一昔前は不良っぽい主人公とか流行っていたけどさ！ けど、劣化って！ 確かに基本的にあいっつらは頭良かったり家事ができたりするから、どっちもできない俺は確

かにそうだけど！でも、どうせならもうちよつと格好良いやつにしてくれよ！

「ほら、そうとわかったらさっさと手を動かせ。そんな風と呼ばれたくなかつたらな」

「……くそっ！わかつたよ、やってやろうじゃねーか！劣化版が取れるようにな！」

「いや、ラノベ主人公の方はいいのか？」

涼真が何か言ってくるが、知ったことではない。

ラノベ主人公、基本的に凄^すいやつばかりだしな。

俺は全身のやる気を掻^かき集めて、補習プリントを解く。……まあ、何にせよ、これだけはきつちりやつておかないといけないから、ちよつどいいんだろう。

すると。そのタイミングで、涼真が話しかけてくる。

「そーいや、拓也。一つ聞いてもいいか？」

「ん？なんだよ、涼真？」

理由はあれにしても、せっかくやる気を出したのに。

出鼻をくじかれてムツとするが、涼真はそれにも構わず訊^きねてくる。

「拓也、最近なんか変わったことあっただろ？」

「えっ？……ど、どうしてそう思うんだよ？」

「いや、だって、俺に流行の服とか髪^{かみ}のセットには何を使えばいいとかLINEで聞い

てきたりしてただろ？そりゃあ、不思議に思うに決まってるだろうが」

「そ、そっか」

ふとしたときに、氷川さんと外で会う可能性があるから、知り合いのなかで一番そういうことに頼^{たの}りになるやつに聞いていたんだけど。そりゃ、そうか。これまで興味を持つてなかつたら、不思議に思うに決まってるよな。

「まあ、変わったことはあったよ。なんつーか……気になる人ができたっていうか」

「二次元に？」

「そういうベタなボケはいいから。んなわけないだろ」

「いや、割とマジで訊^きいてる」

「だとしたら、俺、どういう人間だと思われてんだよ！」

俺、こいつにそんな風に思われてたの!?確かに、こいつにオタクを隠^{かく}したことはないけど、え、マジで!?二次元と三次元の区別がつかないやつだと思われてたの!?

って、そういう話じゃない。

俺は咳^{せき}払いをして、話を切り替^かえる。

「その……マジで気になる人ができたんだよ。もちろん三次元にな」

「……本気か？」

「なんで疑ってんだよ。嘘^{うそ}言う理由がないだろうが」

「いや、あの拓也がそういうことになるとは思わなくて……何があつたんだ？」
訝^{いぶか}しげに訊ねてくる涼真。

こいつ、どれだけ信じてないんだよ。まあ、説明するのはいいけどさ。

俺が氷川さんとの出来事を話すと、涼真はふむふむと黙^{だま}ったまま聞いていた。
名前とか、そういった個人情報はもちろん伏^ふせている。

全て語り終えると、涼真は口元を緩^{ゆる}めて。

「ほう、拓也にそんなことがね……ふーん、あの拓也にね」

「ど、どういう意味だよ？」

「いや、別に。なんだか弟の恋愛相談に乗っているみたいで新鮮^{しんせん}なだけだ。……で、その女の子からメッセージを取り消されて——それ以来、連絡が来ないと」

「……そう、なんだよな」

「連絡が来ないなら、誤字を修正したかったわけじゃないだろうな。となると……拓也、お前何かやつたんじゃないか？」

「や、やつばそうなるか？」

今までぼんやりとした懸念^{けんねん}は抱^{いだ}いていたが……涼真にもそう言われると、それが急に具

体性を持ったような気がして。

「まあ、俺はそのLINEの内容を見てないから憶測^{おくそく}でしかないが——もし、ずっとメッセージが来ないままなら、あんまり自分から絡^{かち}みに行くのは止め^やめといった方がいいかもな」
涼真はそう締^しめくくる。

それを真に受けて、俺は思いつき落ち込んだ。
そのときは。



それから、帰宅した後——俺は一人でそわそわしていた。

それも当然。何故なら、氷川さんからこんなメッセージが届いたからだ。

【氷川真白】 霧島くん。今日の二十時にマンションの前で会えませんか？

もう来ないと思っていた連絡だからこそ、それだけで嬉^{うれ}しいに決まっ^ていて。

ったく、涼真のやつ脅^{おど}かしやがって。ちよつと真剣^{しんけん}に考えちゃったじゃねーか。

しかし、もうそろそろ約束の二十時になろうとしていた。時間が近づくにつれて、俺は心を落ち着かせるために家の中を見回してしまう。

俺以外の人の気配がない静かな部屋。それが、俺の家だ。

わけあって、現在、俺は2LDKの家で一人暮らしをしている。

といっても、別段深い理由があるわけではない。

親が長期の海外出張に行っているだけだ。姉もいるが、あのひとも一人暮らし。一緒に暮らしてはない。この辺りは、ラノベ主人公の設定みたいだなあ……と思うが、残念ながら、あいつらみたいなわっきやうふふの生活を送れたことはない。

学生にしては、かなり良い待遇で一人暮らしをさせてもらっていると思う。

まあ、時々、親が帰ってくるからなだけだ。

でも、このマンションに住んでいるのは基本的に家族だったり、当たり前だけど一人暮らしをしているのも大人ばかりだから、傍から見れば俺もそう思われてそう。

目つきのせいか、大人っぽく見られがちだしな、俺。

「……って、そろそろ二十時か」

いや、正確にはあと十分ぐらいあるんだけど——早めに出ておいた方がいいだろう。

靴を履くと、俺は玄関の鍵をかけてエレベーターで一階まで降りる。

だが、エントランスまで行くと、氷川さんは既に待っていた。

「す、すみません。お待たせしました」

「ううん、気にしないで。私がちよっと早く来ちゃっただけだから。それに、まだまだ待ち合わせの時間は過ぎてないし」

ふわりと微笑む氷川さん。

氷川さんは初めて会ったときのように、清楚っぽい格好をしていた。

白いブラウスに、なんかひらひらがついたロングスカートで——って、俺、女の子の服について知らなすぎるだろ。

しかも、心なしか以前よりも化粧にも気合いが入っているように思えて。

……女の子って大変なんだな。

こんな時間まで、ちゃんとお化粧しておかないといけないなんて。お化粧は時間とともに取れてしまうことがあるとすら聞くのに、氷川さんはその辺は流石すぎる。まるで、俺との時間のためにわざわざ化粧をし直したかのようだ。

と、そこで。俺は氷川さんが鍋を持っていることに気づいた。

中身は、カレー……だろうか？ でも、なんで鍋を？

俺の視線に気づいて、氷川さんは緊張したように鍋を突き出してくる。

「あ、あの、これ良かったらどうぞ。その、迷惑^{めいわく}じゃなければいいんだけど……一応、この前のお礼ということだ」

「えっ？ い、いいんですか？」

「うん。朝につくり過ぎちゃったから、その、食べてもらえると嬉しいかな。霧島くん、一人暮らしでご飯をつくるのが大変^{たいへん}って言っていたから、それで……あ、でも、味の方はあんまり自信がないから、お礼にはならないかもしれないけど」

「いや、そんなことないっす！ すげー美味^{おい}しそうです！」

「そ、そう？ ……それなら良かったかな」

胸に手をあてて、ふうーつと息を吐^はき出す氷川さん。

中身は、予想通りカレーだった。凄^{すご}く香^{かう}ばしい匂^{にお}いがする。

量^{りょう}はありそうだけど、うん、カレーなら数日は持ちそうだし、食べられそうだ。

しかも、気になってる女の子の手作りなんて。嬉^{うれ}しくないわけがない。

「でも、朝からしっかり料理するなんて、やっぱり氷川さんって料理好きなんですね」

「や、やっぱりって。……私^{わたし}ってそんなに料理好きに見えるかな？」

「？ は、はい。個人的にはそうですけど……？」

「へえー、そうなんだ。ふーん」

髪先をくるくると弄^{いじ}りながら、それでも嬉^{うれ}しそうに口元を綻^{ほころ}ばせる氷川さん。

その姿を可愛^{かわい}らしく思^{おも}ってしまい、俺は続けて言^いってしまう。

「なんというか、氷川さんって家でもお洒落^{しゃれ}な感じ^{かんじ}で過^{すご}してそうですし。そういう雰^{ふん}囲^い気から、料理好きっぽいなって勝手に思^{おも}ってました」

「そ、そうなんだ。……で、でも、まあ？ そういうことなくないかな？」

「へえー！ やっぱりイメージ通り、氷川さんってデキる大人みたいな生活を送^{おく}ってるんですね！」

俺がそう言^いった途端^{とたん}、氷川さんが「う」と一瞬^{いつしゆん}だけ苦虫を噛^かみ潰^{つぶ}したような顔をした。

……どうしたんだろうか。もう元^{もと}に戻^{もど}ってるから、単^{ただ}に見聞^{みぶん}違い^{ちが}いかもしれないけど。取り敢^あえず気にすることなく、俺は訊^きねる。

「ってことは、氷川さんってもしかして家でもきっちりとしていたり？」

「そ、そう、ね……そ、そういうことも、なくもないかも」

「あとは、休日でも気を抜^ぬくことなく、お洒落^{しゃれ}な服とか着^きていたりとか」

「っ」

「他にも、部屋の内装とかに超^{あま}こだわって凄^{すご}くセンス良^よさそうですね」

「……っ！」

「それから、料理も毎日しててキッチンとかも凄くピカピカで、俺みたいなずばらにとつては見習う点が多そうっていうか——って、氷川さんさっきからどうしたんですか！ 凄く苦しそうな顔してますけど！」

「だ、大丈夫だから。ほ、ほんと、大したことないから。その、気にしないで」

「そ、そうですか……？」

「うん、ちょっと死にたくなっただけだから」

「それはかなり重傷では!？」

大丈夫だろうか。もしかして、さっきの苦々しげな表情で痛みの何かを我慢していたからなんだろうか。「大丈夫、大丈夫」と、氷川さんが繰り返しているから、大したことはないんだろうけど。

けど。俺は鍋に視線を落としながら言う。

「でも、こんなの貰ったら、俺も氷川さんに何かお礼をしなきゃいけませんね」

「えっ？ そ、そんな大丈夫よ？ そもそも、助けられたのは私の方なんだから」

「でも……」

俺のやったこととお礼が、ちょっと釣り合っていない気がする。いや、俺が氷川さんの手作りに必要以上の価値を見いだしている可能性はあるけど。だけど、それでもなあ……

と、そのとき。

何かを思いついたように、氷川さんはハッと顔を上げて。

「……あ、あのっ、霧島くん。そ、それなら、一つだけ我儘を言ってもいいかな？」

「はい？ 全然、大丈夫ですけど……」

「え、えーっと……実はね、最近、好きなアニメ作品がカフェとコラボを始めて。すっごく行きたいんだけど、ただ一人ではなかなか勇気が出なくて」

「……あの、もしよかったらでいいんだけど。その、一緒に行かない？ それが、霧島くんから私へのお礼ということ……」

頬を紅潮させて、おずおずと見つめてくる氷川さん。

息を呑む。だって、それはつまりデートをしてくださいと言われていたようなもので。

氷川さんはわたわたと手を振る。

「ご、ごめんねっ。きゅ、急に变なことを言っちゃって。や、やっぱりダメだね——」

「い、いやっ、大丈夫です！ い、行きましょうそのカフェ！」

「ほ、本当っ？」

食い気味に反応して、嬉しそうに顔を近づける氷川さん。
しかし、その反応は過剰だったとでも感じたのか、氷川さんは慌てたように身を引くと髪を撫でつけて。

「……じゃ、そういうことで。あつ、食べ終わったら教えてね。お鍋、取りに来るから」

「い、いえ、俺が持つて行きますよ」

「そ、そう？ それならお願いしよっかな」

ふふつと口元を綻ばせる氷川さん。

それから、彼女は穏やかに微笑んでこう言ったのだった。

「じゃあ。おやすみ、霧島くん——今度のお出かけ、私、楽しみにしてるね」

第三章

春休み。土曜日。

氷川さんとお出かけする当日。

朝起きると、何故か、幼馴染み（女）が家の中に勝手に上がり込んでいた。

……いや、嘘だと思っていたんだけど本当なんだ。

しかも、少しも悪びれることなく、そいつはスマホで動画を見ながらくつろいでいて。「あつ、拓也さん。やっと起きたんですか？ おはようございます、お邪魔してまーす」

一目で陽キャラとわかる雰囲気をつたせたそいつは、ごろごろと寝返りを打つ。

染められた明るい髪は肩ほどまであり、シユシユでまとめられていた。

ちようど大人と子供の間にある顔立ちには、一般的には可愛いの種類に入るらしい。

付き合いが長いせいで、ちよつとピンとはこないけど。

スカートから覗く健康的な足は眩しく、パタパタと動かしているせいでちょいちょいパ
ンツが見えそうになる。

こいつの名前は、小桜木乃葉。

所謂、幼馴染みってやつだが——年齢は、俺の一個下。まだギリギリ中学三年生で、この春から華の女子高生だ。

そして、俺が家を借りている大家さんの一人娘でもある。

木乃葉が家にいるのは、別段、珍しいことではなかったりする。

ここ一年ぐらいは、俺の家のWi-Fiを使うためとかで、時々遊びにきたりとかするし。何でも、スマホで動画を見たいらしい。俺の家では、ゲームのために高速なやつを契約してもらっているから都合が良いんだろう。

だから、木乃葉が家にいるのは別にいい。

もつと言うなら、家に勝手に上がり込んでいるのも、まあ、日常茶飯事だったりする。

大家さんの一人娘という特権を利用して、こいつは親から勝手に合鍵を拝借して遊びにきたりしているのだ。一応、注意はしているが……まあ、効果はご覧の通り。

だから、それらは今更なのだけど。

……こいつ、今日は何しに来たんだ？

動画を見るだけなら、別に今日じゃなくてもいいじゃん。

今日は、氷川さんとの予定があるんだからさ。正直、準備に集中したいんだけど。

俺が訝しげに見ていると、木乃葉はムツとしてスカートの端っこを掴んで引っ張って。



「ちょっと、拓也さん。さつきから、なにエロい目で見てきてるんですか？ 私が可愛いからって、そーゆーことやめてくれませんか？」

「はっ？　なんで、俺がお前なんかのパンツを見ると思ってたんの？」
「どういう意味ですか、それ!!」

どうもこうもない。そのままの意味である。

正直、こいつのパンツなんて見飽きてるし、見たところで何とも思わない。
妹のパンツを見ても、何も思わないのと同じだ。

俺、妹いないから想像で言ってるだけだけど。

ってか、お前、自分で自分のこと可愛いって言うの止めろよ。

「……で、木乃葉、お前何しに来たの？」

恨みがましい目つきで見ると、木乃葉は唇を尖らせる。

「なんですか、その言い方。せつかく、今日は拓也さんをお誘いに来たのに」
「お誘い？」

「はい。今日、私とデートしませんか♡」

「断る」

俺は即座に言い放った。

木乃葉はむーっと頬を膨らませて、ぶんぶん俺の腕を引く張ってくる。

「えー、なんでですかー。私とデートできるんですよ？　一緒に出かけましょうよー」

「前から思ってたけど、お前、自己評価結構高いよな……」

「行きましょうよー。全額、拓也さんの奢りでいいですからー」

「奢りでいいからってなんだよ！　さては、お前それが狙いだな！」

「どうせ、なんかキモい小説を読むぐらいしか予定ないんですよ？　それなら、私に付き合ってくれてもいいじゃないですか」

「言い方！　お前みたいな奴から見たら、そうなのかもしれないけどさ！」

一応、俺にとっては大好きな作品たちなんだよ。

悪く言われるのは、やっぱり良い気分はしない。

「そうじゃなくてさ。行けないのは、単純に予定があるんだよ」

「え？　でも、それって、アニメ見たりするとか、そういう予定ですよね？」

「流石に、それで断ったりしねーよ！」

俺は一般的な常識について言ったつもりだったが、木乃葉は首をゆるめると振って。

「いや、割とありますよ。最低、五回以上は」

「え、そうだっけ……？」

「はい、確か二週間前もそれで断られましたし。よくわからないですけど、一挙放送があるとかで、夜遅くは無理だとか言っていました」

「……………あー、それは悪い」

思い出した。確かにそう言って断ったこともあった。

でも、あれは仕方ないんだよ。シユタゲの一挙放送がやってたんだから、見ちゃうだろ？　そういうもんだろ？

「と、とにかく、今回はそういうのじゃない。正真正銘ちゃんとした用事だ」

「じゃあ、言ってみてください。違ったら怒りますからね」

もし違ったら軽蔑します、とでも言いたげに冷たい視線を送ってくる木乃葉。

こいつの視線への耐性がなかったら、心がへし折られているところだ。

まあ、でも、今回は本当にちゃんとした用事だからな。

俺は自信満々に答える。

「実は、本屋で知り合った女の子と遊びに行くんだよ」

「……………最っ低ですわね。そんな嘘までついて、私と出かけたくないんですか？　私、拓也さんのこと見損ないました」

「嘘じゃないからな!？」

木乃葉が汚物を見るような目をするのに対し、俺は全力で叫んだ。

「はっ？　拓也さんが、本屋で知り合った女の子と遊びに行くとか。そんなこと信じられると思います？」

「言いたいことはわかるけどさ！　マジなんだって！」

尚も熱く訴えかけると、木乃葉は呆れたように息をついて。

「……………はいはい、拓也さんがそこまで言うならわかりましたよ。私も信じました」

「ほ、本当か？　それなら良かった——」

「本屋で？　知り合った？　女の子と？　遊びに行くんですよね？」

「絶対、信じてねえだろ！」

「取り敢えず、拓也さん病院に行きましょう。話はそれからです」

「俺が知り合った女の子と出かけるのって、そのレベルなの!？」

一ミリも信じられていなかった。

悔しくて、俺は氷川さんとのトーク画面を見せる。

「ほら、これ見ろよ！　嘘じゃないからな！」

「はいはい。別に、そんなものを見せなくても……………え、嘘、マジですか？　拓也さんの言ってることマジじゃないですか！」

「だから、最初からそう言っただろ」

「……いったい、拓也さんに何があったんですか？」

不審^{ふしん}げな目で見てくる木乃葉。

涼真^{りょうま}同様に、完全に疑われている。こいつら、本当に俺のこと信用してないよな……

俺はこれまであったことを話す。

すると、木乃葉はふーんとわかったようなわかっていないような返事をした。

なんか、思ってたより反応が薄^{うす}い。いったいどうしたんだ、こいつ？

「……そうですか。拓也さんが女の子と遊びに行くんですか。これは、いい傾向^{傾向}なのかも」

「おい、木乃葉？ どうしたんだ？」

「いえいえ。なんでもありませんよー？」

につこりと笑顔^{えが}をつくる木乃葉。

いや、なんでもないってことはないだろ。明らかに、ぶつぶつ呟^{つぶや}いてたしさ。

まあ、気にするなって言うなら気にしないけど。

「で、拓也さんはそのひとのことどう思っているんですか？」

「ど、どうって言われても……そ、それは、なんというか……」

「好きなんですか？」

「う、ご、ごほっごほっ」

あまりにストレートな問いかけに、俺は思わず咳^せき込んだ。

「……うっわー、わかりやす。つてか、唾^{つば}とか普通^{ふつう}に汚^{きた}いんですけど」

「そ、それは悪い……けど、お前が変なこと言うからだろ」

「別に変なこと言ったつもりはないですけど。でも、ふーん、そうなんだ……拓也さん、そのひとのこと好きなんですな」

「べ、別にそこまでは言っただろ！ 少しは気になっているのは認めるけどさ……」

顔が熱くなる。

うわっ、気になってることを知られるのってこんなに恥^はずかしいのかよ。

こいつは昔から知っているだけに、なんかプラスで恥^はずかしい。

でも、バレたならバレたで仕方ない。

これ以上恥^はずかしいことはないだろうし、聞きたかったことを聞くしかない。

「……あのさ、ちょっと相談なんけどさ」

「なんですか？」

「もし、もし、だぞ？ たとえば、そのひとともし仲良^なくなりましたかったり、付き合いた
いと思っただら……ど、どうすればいいと思う？」

「え？ 拓也さん、そこまで好きなんですか？」
「ち、違うって！ た、たとえばの話だよ！」

「たとえば、ですか……拓也さん、今日遊びに行くのでしたっけ？ それなら告っちゃえばいいんじゃないですか？」

「お前、何言ってるの!？」

あまりにもテキトーに思える発言に、俺は叫んだ。

「さ、さっきも言っただろう。俺たち、この間初めて会ったばっかなんだぞ？」

「恋愛に早いも遅いもありまんよ。出会ったのは一日前だろうが、一週間前だろうが、一秒前だろうが、告白するタイミングに決まりなんかありませんって」

いや。

流石に、一秒前はあると思う。

「いや、でもさ。その、三回遊びに行ったらみたいなこと言うだろう？」

「え、拓也さん。デートに三回も誘う度胸あるんですか？」

「う……」

確かに、ないけどさ。

ぐうの音も出ない正論だけどさ——そういう辛いことを真正面から言うなよ！

せつかくの勇氣がなくなりそうになるだろ！

「それに、拓也さんどうせ駆け引きとかできないんですし？ 馬鹿みたいに、真っ直ぐ告

白するのが一番合ってるんじゃないですか？」

「いや、馬鹿みたいにして……」

「言っておきますけど、女の子はいつまでも待つてるとか幻想ですからね？ 可愛い女の

子なんて、他の男が放っておかないんですから」

「う」

「食らえ、『可愛い女の子にはだいたい彼氏がいる』ビーム！」

「そういうこと言うの、やめてくれない！」

知ってるけど！ 知ってるけどさあ！

そういうことは考えないようにしてるんだよ！

だけど、木乃葉のアドバイスはその通りかもしれないなかった。

恋愛経験のない俺に駆け引きなんてできるわけもない。

それならば、木乃葉の言う通りにすべきだとも思えて。

そのとき、木乃葉は上目遣いで顔を覗き込んできて。

「でも、まあ、もし失敗しても大丈夫ですよ」

「えっ？」

「フラれたときには、私が彼女になって拓也さんを慰めてあげますから」

こ悪魔めいた笑みとともに、木乃葉が耳元で囁いてくる。

私が彼女になって慰めてあげる。

その言葉に、ごくりと息を呑む。

付き合いが長く、異性として意識したことがなかった幼馴染。

そんな女の子からの言葉でも、男としては反応してしまうのが性ってやつで――

「まあ、もちろん、拓也さんが毎月五万円貢いでくれるならですけど」

「お前はATMとでも付き合ってろ」

俺は唾棄しながら、そう言い放った。



「……ったく、木乃葉のやつ変なこと言いやがって」

それから、数時間後。

俺は落ち着いた霧囲気の慶花町駅を歩いていた。

待ち合わせ場所をどうするかってなったときに、お互いに慶花町駅が近いからここで集合することにしたのだ。目的地はこの駅じゃないけど、お互い近所に住んでるのにわざわざ現地集合にする理由もないし。

だから、俺は慶花町駅を歩いていたのだが……集合場所にはなかなか辿り着かなかった。単純な理由。

道中で何度もトイレに入ったりして、髪形などの身なりを確認してしまったからだ。

いや、髪形や身なり程度で、俺の怖い顔が変わるわけじゃないけどさ。や、やつは、一番良い状態でいたいじゃん！ わかるよな？ きつと、みんなこんなことしてるよな？

しかし、それでも、待ち合わせ場所――駅の交番前には徐々に近づいていって。結局、早く出すぎたせいで、俺は三十分前に交番前に辿り着いてしまっていた。

……しまった、どうしよう。流石に、氷川さんいないだろうし。かといって、時間を潰すような場所って言われてもなあ。

取り敢えず、駅前の本屋さんに入るか。……ラノベでも見てたら落ち着くだろう、多分。そう心の中で決める否や、俺は駅前にある本屋さんの方へと靴先を向け。

「……あれ？」

ふと、視界に見たことある人影が映った。

氷川さん、だ。

彼女は三十分前だというのに、既に待ち合わせ場所近くの柱の横に立っていた。

数秒ごとにそわそわして、氷川さんは近くの建物の窓ガラスに顔を向けたりしている。

距離があるせいで正確にはわからないが、何か呟きながら髪を弄っているようにも見える。

えーっと……何してんだ、あのひと？

取り敢えず声をかけるために、俺は近づいていった。

ある程度、距離を詰めると、氷川さんの声が聞こえてくるようになる。

「……えーっと、か、格好はこれで変じゃないよね。霧島くんが、こういうの嫌いじゃないか？」

氷川さんは何度も窓ガラスで自分の姿を確認し、髪の毛に手櫛を通していた。

それから、指で口角をあげて窓ガラスにこっと笑ってみせる。

そのとき。

にこっと笑った氷川さんと窓ガラス越しに、視線が合ってしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

「な、なあに？ 私は今来たところなんだけど、霧島くんも？」

「いや、でも、今、氷川さん——」

「私は今来たところなんだけど、霧島くんもかな？」

有無を言わせない調子だった。

氷川さんは真つ赤な顔で、涙目とともにぶるぶると震えていた。

恐らく、これ以上、この話題には触れるなってしまうだろう。

——そこで。

初めて、俺は氷川さんの今日の格好をマジマジと見た。

これまでとはまた少し違った、春らしい色合いの清楚なワンピース。

優しい年上のお姉さんみたいで、正直、滅茶苦茶ドストライクな格好だった。

思わず見惚れてしまう。

俺の視線に気づくと、氷川さんは恥ずかしそうに自分の服装に視線を落として。

「そ、その……ど、どうかな？ 友達からおすすめされた服なんだけど、普段ワンピースとか着ないからよくわからなくて……へ、変じゃない？」

「え、えっと……その、俺、ファッションとか疎いから、あんまり流行とかわからないんですけど……でも、すげー可愛いですよ？」

「……っ！　そ、そう？　あ、ありがとっ」

照れているのか耳まで真っ赤にし、口元を嬉しそうにもによもとさせる氷川さん。拙い言葉なのに、そこまで喜んでもらうとなんか照れ臭い。俺も顔が熱くなるのを感じる。

「そ、それじゃ、そろそろ行こっか」

未だに顔を赤くしたまま、氷川さんは穏やかな微笑を向けてきて。

「霧島くん、今日はよろしくね」

それから、俺たちが向かったのは東京テレポート駅だった。

東京テレポート駅っていうと、どこかわからない人も多いかもしれないが——端的に言えば、お台場の最寄り駅だ。お台場がわからない人は、リア充と陽キャラが蔓延っている忌むべき場所と覚えてくれれば問題ない。

まあ、そんな場所に、俺は氷川さんと遊びに来てるんだけど。

しかし、ここまでは自分でも驚くぐらい上手く行っていた。

それはもう俺みたいな恋愛経験どころか——誰かと遊びに行く経験すらない奴には珍し

いぐらいに。単純に、氷川さんがいい人だからってのもあるのだろうけど。

だが、

「……って、えっ。うわっ、雨が降ってる……」

駅から出ると、いつの間にか外では雨が降っていた。

しかも、雨足はかなり強い。一応、濡れないように歩くこともできるが——これだけ勢いが強烈なら、傘を差した方がいいに決まってい

……でも、俺、傘なんて持ってきてたっけ？

鞆の中に傘なんて入れた覚えがない。し、しまった。服には気を回してたけど、天気までは確認できてなかった。まさか、ここで想定外のことが起こるなんて……

手探りで鞆の中を漁るが、もちろん傘なんて入ってるわけがなくて。

「もしかして、傘、持ってきてない？」

ばさっ。——突然、頭上に傘が広げられる。

隣では、氷川さんが折りたたみ傘を掲げて立っていた。

彼女は可愛らしく首を傾げ。

「……持ってきてないなら、霧島くん、私の傘の中に入る？」

「い、いや、大丈夫ですっ。傘が小さいから、俺が入ると氷川さんが濡れちゃいますし。お、

俺は濡れても大丈夫なんだ」

「それは、駄目。風邪を引いちゃったら、どうするの？」

ムツと、たしなめるように睨んでくる氷川さん。

けれども、全く怖くない。むしろ怒っている姿も可愛い。

まともに直視できず、俺は氷川さんから視線を逸らす。

「で、でも、実際傘は小さいですし——」

「でも、じゃないでしょ。それに、傘については大丈夫。ぴったり近づけば、二人でも入れるから。ほら」

言って、ほとんど肌が触れ合う距離まで密着してくる氷川さん。

傘の中にきつちりと入ると、「ほらね？」とでも言いたげにっこりと微笑む。

ほらね、じゃない！

これなら確かに濡れないけど、緊張してそれどころじゃない！

しかも、なんか良い匂いするし！ 時々、当たる腕とか柔らかいし！

「あ、あの……せめて傘を持たせてください。ただ入れてもらうのも気が引けるんで」

「そう？ じゃあ、お願いしようかな。はい」

差し出された傘を、俺は受け取る。

それから二人で一緒の傘に入って歩くが、今までこういう経験がないせいか上手いやり方がさっぱりわからない。必死に傘を動かすが、その度に身体が触れ合ったりして、緊張で傘を持つて手が震えてしまう。

えっ？ ど、どうすれば、氷川さんを濡らさずにできるんだ？

「霧島くん？ そんなに、こつちに寄せなくても大丈夫だよ？ 君の肩が濡れちゃうし」

「そ、そう言われても、借りたものですし……」

「ふふっ、そんなに遠慮しなくてもいいのに。それに、まだまだ、私の方には空きがあるから。だから、ほら、ね」

綺麗な細い指で、氷川さんがそつと俺の傘を持つ手を動かす。それだけで、俺は頬が熱くなつていくのを感じてしまう。

……っというか、これ、相合傘だよな。

え、こんなあつさりするものなの？ き、気にしている俺がおかしいのか？

氷川さんは全く気にしてないのか？

チラッと、俺は隣の氷川さんの様子を窺うと——

「……………（赤面&硬直）」

まるで自分が何をしたか今気づいたように、氷川さんは固まっていた。

自分からやったのに、明らかに照れている。

氷川さんは頬を染めたまま、恥はずかしそうに微笑む。

「な、なんか照れるねっ。さっきまでお喋りしやべをしてたはずなのに緊張しちゃって……」

「そ、そうっすね」

「……………」

「……………」

俺たちは黙だまり込んでしまう。

なんというか、嬉しさと羞恥心しゆうちしんが半々ぐらいで同居してて……その、端的に言ううと凄すこく恥はずかしい。

だけれど、意識すればするほど、またもや傘が揺ゆれて動いてしまつて。なんとか氷川さんだけは濡らさないように努めてはいるが、代わりに俺が濡れてしまつて。

そのとき。

「っ」

突然、氷川さんがぴったりと身を寄せてきた。

隙間すまみなんてなく、完全密着してしまっている。それどころか、触れた箇所かしよから仄かな熱が伝わってくるような気すらして。

え、えっ？ な、なんで、氷川さんこんなことしてるんだっ？

内心驚いていると、氷川さんは頬を赤らめたままチラツと見てきて。

「そ、その……こうすればもう濡れないと思うから、ね？」

「そ、そうですね」

俺はこくこくと頷うなずく。

氷川さんの行動の真意はわからない。

だけれど、取り敢とえず今は、偶然ぐうぜんから生まれた相合傘に感謝することにした。

それから、相合傘で歩くこと十分——

俺たちは目的地であるアニメコラボしているカフェにやってきていた。

カフェに入ると、出迎でむかえたのはアニメの世界観に沿った光景で。まるで、このカフェだけが異世界になったかのようだった。

ここで補足しておくと、このカフェがコラボしている作品は『アオの奇跡きせき』というタイプのアニメだ。アニメオリジナルながらも根強いファンの人気から、ついに三期まで制作され——少し前には、劇場版まで出た超人気コンテンツである。

内容の説明もしておくと、『アオの奇跡』はファンタジー要素をがつつり交えながらも現代を舞台にした群像劇モノだ。

メインはバトルだが、コメディも、青春も、友情も、恋愛要素もある。某少年向け漫画雑誌で連載されていたようなテイストだったが、イケメンの男性キャラを中心に話が展開していくせいとか、女性人気も非常に強い作品だった。かといって、男性人気が弱いわけではなく、どちらも楽しめるって感じの作品だ。

氷川さんが事前に予約をしてくれていたのか、俺たちがカフェに入ると、店員さんにスムーズに案内される。

店内の食事スペースも、アニメの世界観に染められていた。

それぞれの席が、アオの奇跡のどこかしらのシーンに沿っているらしい。

そうして店内をくねくねと歩いて、俺たちが辿り着いたのは――

「えっ？ これ、アニメ十六話に出てくる教会じゃないですか？」

個室席というのだろうか。

部屋の中はカラオケみたいに大小それぞれのソファとテーブルが設置されており、装飾はアニメのシーンを彷彿とさせるようにつくられていた。アニメに出てくる『教会』にそっくりすぎる。ここに来たいと言う氷川さんの気持ちもよくわかった。

「ふふっ、凄いいね。私も初めてネットで見たときに、びっくりしちゃった」
 すげーすげーと小学生並みの感想を繰り返す俺を見て、氷川さんは微笑む。
 しかし、その瞳は子供のようにキラキラと輝いていて。
 うん、氷川さんもやっぱり興奮しているらしい。わかる。これほど精緻に再現されてたら、オタクならそうなんても無理ないと思う。

「じゃ、霧島くん座ろっか」

「はい、そうですね……………えっ？」

「ん？ ど、どうしたのかな、霧島くん？」

不思議そうに、しかし、ほんのりと頬を赤らめたまま首を傾げてくる氷川さん。

だが、それでも、疑問に思わずにはいられない。

だって、氷川さんが当たり前の前のように俺の隣に座ってきたのだから。

……いや、確かに対面の席は狭いし、俺の隣には座れなくもないんだけど。でも、一緒に座るということは必然的に密着してしまうわけ。

俺は思わず対面の席を指差してしまう。

「あ、あの、氷川さん……向こうの席の方が広いですよ？」

「うん、そうだね」

「……………」
「……………」

まさかのスルーだった。

え、ちょっと待ったそんなことであるか!?

それとも、俺が知らないだけで世間ではこういう席は一緒に隣に座るものなのか!?

「……え、あの、氷川さん？　なんで、隣に？　あっちの席が空いてますけど——って、どうして急に対面の席に荷物を!?　しかも、今、俺が言ってから始めませんでした!？」

「ほら、霧島くんも荷物貸して？　置いてあげるよ？」

「あ、ありがとうございます。で、でもですね。俺のも氷川さんの荷物も、足下にある荷物ケースを使えばいいと思うんですけど——」

「あの、店員さんこれ片付けてもらってもいいですか？（荷物ケースを手渡しながら）」
「だから、どうして氷川さんは頑なに荷物を席に置きたがるんですか!？」

わからない！　氷川さんがさっぱりわからない！

しかし、荷物を対面の席に置くと、氷川さんは「ここにしか座れないから仕方ない」とでも言わんばかりに隣に座ってくる。

……う、うん、これはきつと気になってる俺がおかしいんだろう。

俺が経験がなさすぎて知らないだけで、きつとこの距離感であってるんだ。

俺も覚悟を決めて、そのまま氷川さんの隣に座り続けることにする。……が、やっぱり肩が当たったり、手の甲が触れ合ったりして気が気じゃない。

氷川さんはどう思っているんだろう？

流石に疑問に思ってしまったって、俺は恐る恐る氷川さんの方を窺うと。

「……………」（赤面&硬直）」

氷川さんは何故かかちこちに固まって座っていた。

まるで、相合傘のときのようにびしりと固まってしまっている。

それどころか、熱でもあるのか顔が上気していて。

「あ、あの、氷川さん大丈夫——」

「う、うん、大丈夫だから。ちょっと狭いところに一緒に座ってるせいで、少し体温が上がってるだけだから」

「それなら、尚のこと、向こうの席の方に座った方がいいと思うんですけど!」
「だけれど、やっぱり氷川さんは頑なに譲ろうとしなかった。」

ま、まあ、俺としては別にいいんだけどさ……でも、こんなに密着されてしまうと、正直勘違いしそうになる。

そんな風に意識してしまったせいかな、俺たちの間には妙な雰囲気みょうふんいきが漂ただよって。

そのタイミングで、氷川さんがバツと顔を上げて提案してくれる。

「じゃ、じゃあ、取り敢えず何か頼たのもつか。霧島くんは何を食べたい？」

「そ、そうですね。えーっと、どんなのがあるんですか？」

気分を切り替かえるように、メニュー表を覗のぞき込む。

それから距離きょりが近いことにも慣れてきたのか、俺たちはわいわいと言い合いながらメニュー表を見て。

そうして三十分後には、俺たちは軽食を食べ終わっていた。

頼んだのは、アニメに出てくるキャラをイメージしたランチメニュー。特典としてキャラのコースターが添そえられており、これだけで来た価値があったなと思わされてしまう。それにしても、やっぱりここにいと、否いやが応でもアニメのことを意識してしまつて。

「……なんか、ここにいと、アニメのこと思い出しちゃいますよね」

「あつ、霧島くんも？ 実は、私も」

そんな感想もを漏もらすと、悪戯いたづらの共犯を見つけた子供のように笑ってみせる氷川さん。俺は言う。

「『アオの奇跡』の十六話。この個室がモチーフになつてゐるあの話、良かったですよ」

「あつ、霧島くんもそう思う？ そ、そうだよ。特に、アレスが教会の前でセレスティアに告白するシーンとかはとっても良いよね」

思い出すように目を細める氷川さん。

よつほど、その話がお気に入りなんだろうか。

ちなみに、アレスとは『アオの奇跡』に出てくる主力級のイケメン男性キャラである。見た目はヤンキーっぽく、性格もぶつさらぼうだが、根はとても優しいキャラクターだった。非常に女性人気が強く、作中でもかなりフィーチャーされていたはずだ。

氷川さんは楽しそうに続ける。

「元々、スラム街の札付きの不良だったアレスが、お嬢様お嬢さまだったセレスティアに拾ひろわれて改心してつ。それから専属の従者として働はたらきながらも、セレスティアへの恋心こいこころを抑おさえきれず——最終的には告白して凄く素敵すてきだよねっ」

「そうですね！ 教会前で指輪を渡すシーンとかもグツときますし！」

「わかるわかる。しかも、あれでただの指輪じゃなくて、アレスが幼い頃ころから肌身離はなさず持っていたお母さんの形見つていうのも、セレスティアを大事に思っていることが伝わはたつてきていいよねっ」

物凄く好きなのか、とても熱く語る氷川さん。

だが、過剰な反応をしすぎたと思ったのか、氷川さんはハツとすると、ばたばたと手で顔を仰ぎながら照れたように言葉を口にする。

「ご、ごめんねっ。ちよつと熱が入っちゃって……その、アオの奇跡は、私にとって特別なアニメだから」

「特別なアニメ？」

「うん。私にとって『アオの奇跡』は初めて見た深夜アニメで、大好きになった初めてのアニメだから。だから、多分、今まで見てきた作品のなかで一番好きかな。さつき話してた十六話はその中でも特に。私、アレス推しだから」

氷川さんがはにかみながら、だけれど、芯の通った口調で語る。

それだけで、氷川さんがこのアニメが本当に好きなんだなことがわかった。だからか、俺は思わずそんなことを言ってしまったのだろう。

「なんか、氷川さんと話したら久々にアニメも見なくなってきました。俺、円盤買うほどアニメ好きだったんですけど、もう長いこと見てなくて——」

「本当っ？ それなら、今ここにあるんだけど見るっ？」

途端に食いついてくる氷川さん。

返事をする前に、氷川さんはすすすつと近づいてくる。

ソファ席だからか、それはもうがつり密着して座っているみたいなので。

え、ち、近っ！ さ、流石に、もうちょつと離れた方が……

「あ、あの、氷川さん……その、距離が」

「ん？ きよ、距離がどうしたの？ 私は、君とこれから一緒にアニメを見るために近づいてるだけだよ？」

不思議そうに首を傾げる氷川さん。

だが、□元に浮かぶ笑みが小悪魔めいたものに見えるのは、俺の気のせいだろうか。いや、気のせいなんかじゃない。たぶん。

……まあ、その一方で、氷川さんも照れてるのか顔を真っ赤にしているんだけど。

しかし、そうしている間に、アニメを見るためのセッティングが終わる。

氷川さんはスマホにイヤホンを挿すと、片方のイヤピースは自分が持つて。

「はい、霧島くんはこっち側をつけて」

反対側を差し出してくる。

え、えーっと……これって、イヤホンをつけてくれってことだよな？

え、さつきから、氷川さん本当にどうしたんだ？ だんだん、どこまでが普通なのかわからなくなってきたんだけど。こういうことって普通にするものなのか？ それとも、俺

が考えすぎなのか？

「……あれ、霧島くん見ないの？」

俺が硬直していると、氷川さんが小悪魔めいた笑みとともに——しかし、どこか精一杯といった調子で訊ねてくる。

……あー、なんつかズルい。

そんな風に可愛く言われたら、断るなんて選択肢があるわけがなくて。

「じゃあ、再生するね」

二人で一緒のイヤホンをつけた後。

氷川さんがスマホを机に置いて動画配信サービスで『アオの奇跡』を再生するが——ぶつちやけ、俺はそれどころじゃない。

イヤホンを共有しているせいか、さつきよりも距離が更に近いし、ふんわりと良い匂いもするし、時々腕に柔らかな感触もするし——つて、こんなの集中できるか！

こんな状況で、アニメに入っていけるわけないだろ！

チラッと横を窺うと、興奮気味に事細かに解説してくれる氷川さん。

アニメに合わせて一喜一憂するその姿に可愛いなと思いつつも、俺もいつの間にか引き込まれていつて。



——今の俺はまだ弱くてお前を守るほど強くねえかもしれないけど。
 ——たくさん鍛錬して、努力して、いつか絶対になってやるからさ。
 ——だから、俺と結婚してください。

今、画面に映っているのは、俺たちが先程話していた場面——アレスの告白シーンだった。見晴らしの良い荘厳な教会の前で、アレスが女性キャラに指輪を渡している。

このシーンは、放送当時から人気を博したところだ。
 氷川さんもそうなのか興奮気味の口調で話す。

「ね、ねっ？ このシーン、とても良いと思わない？ 霧島くんもそう思うよね？」
 「そ、そうですね」

「やっぱり、本当に何度見ても良いよね。……一度で良いから、こんなプロポーズされてみたいなあって思っちゃうし。霧島くんも、そう思うよね？」

「流石に思いませんよ！」

男からのプロポーズを見て、流石に羨ましいとは思わない。名シーンだとは思うけど。しかし、そんな感じで、俺たちは感想を言い合いながらアニメを見て——

気がつけば、EDまで辿り着いていた。

それを視認すると、氷川さんはふうと息を吐き出して。

「霧島くん、よかつたら、次の話も……見、る……？」

そこで、ぴたっと固まった。

でも、それも無理ないと思う。……だって、イヤホンを共有していたせいか、俺と氷川さんの距離はキスができそうなほど近づいていて。何度も言おうとは思ったけど、楽しそうにしていたから邪魔するのも忍びなくて、俺は黙っていたんだけど。

「あ、あつ……わ、私……」

今更、現状を思い出したのか硬直する氷川さん。

一拍置いてスマホを掴むと、氷川さんはバツと凄まじい勢いで立ち上がる。

「わ、私、ちょっと席を外すね！ ご、ごめんね！」

そう言つて、ぱたぱたと駆けていく。

……なんか、アニメを見てただけなのに凄い疲れたな。

俺は小さく息を吐き出して、席に身体を預けた。

それから、俺たちは色々な場所を巡った。

一緒に、ゲームセンターに行つてガンシューティングのゲームをしてみたり。本屋さんで、お互いにおすすめのライトノベルを紹介しあったり。アニメショップに行つて、色んなグッズで話に花を咲かせてみたり。そうして――

「く、くくつ……あのとき、氷川さん、ゲームのゾンビに怖がつて全然ダメでしたよね」
「も、もう、霧島くん！ さっきも言ったでしょ！ あ、あのときはちよつと調子が悪かつただけなのっ」

「わかつてますわかつてます。調子が悪かつたんですよね？」

「もう……霧島くん絶対に信じてないよね。いい加減にしないと、私、怒るよ？」

「すみません。なんか、氷川さんの反応が予想以上に面白かつたんで。……許してもらえませんか？ このゲームの景品あげますから――」

「だーめ。絶対に許しませんっ。これは一応貰つておくけど」

言いながら、ぶいっと子供のよう^すに拗ねた様子を見せる氷川さん。

だが、これまでの付き合いのなかで、それはわざということはわかつていて。そんな茶番に、俺と氷川さんは口元を緩めて同時に笑つてしまう。

あれから、もう何時間も経つていた。

今は、帰宅途中。氷川さんと一緒に歩きながら視線を上げると、闇色の空のなかに明るいまが浮かんではいるのが見えた。

笑い声を小さく漏らしながら、氷川さんは噛み締めるように言葉を紡ぐ。

「……今日は、とっても楽しかつたかな。その、霧島くんと一緒に出かけできて。本当にありがとね、霧島くん」

「いえ、俺も楽しかつたです。こちらこそありがとうございました」

「ふふっ。霧島くんと会つてからずっと楽しいことばかりで……あのとき、霧島くんみたいな男の子と出会えて本当に良かった。今日みたいに、オタクトークもできるしね」

「う……」

につこりとした笑顔とともに無自覚そうに、しかし、だからこそ破壊力抜群な台詞を口にする氷川さん。

このひと、こういうところあるよな……無意識に殺しにきているというか。

こんなの、勘違いしてしまつてもおかしくない

でも……今日はこれで終わりだが、この調子なら、また氷川さんと会うことはできるはずだ。本乃葉からは今日「告白」と言われたが、それも急ぐ必要もない。ほら、うん、そ

んなに焦^{あせ}っても仕方ないし。断じて告白するのが怖いとか、そういうわけではない。だけれど、

——言っておきますけど、女の子はいつまでも待っているとかなんか幻想^{げんそう}ですからね？

——可愛い女の子なんて、他の男が放っておかないんですから。

「……どうしたの、霧島くん？ 急に足を止めて」

「い、いえ、なんでもありません」

氷川さんが不思議そうに覗^{のぞ}き込んでくるのに、俺は何とか笑顔で返す。

そうだ。

今は、氷川さんと良い感じかもしれないが——この関係性が、いつまでも続く保証がない。むしろ、自然と終わってしまう方が可能性としては高いんだろう。

それどころか、氷川さんが他の男と付き合う可能性の方がずっと高くて。

そんなことを想像した途端、ずきりと心が痛む。

そうしているうちに、俺たちはいつの間にか互いのマンションの前までやってきていて。

「じゃ、そろそろ……その、お別れかな」

氷川さんがふわりと微笑^{ほほえ}む。

だけれど、氷川さんの足はなかなか動かなかった。

いったい、どうしたんだ……？

不思議そうに見ていると、彼女はそっと上目遣^{うめづ}いで覗き込んできて。

「あ、あのねっ……その、君に伝えたいことがあるんだけど」

氷川さんの頬^ほは上気^{さまよ}していた。それどころか緊張^{きんきょう}でもしているのか、彼女の視線がそわそわと辺りを彷徨^{さまよ}って。口が小さくパクパクと動いて。

ごくりと息を呑^のむ。

だって、その表情は、まるでこれから告白でもするかのようで——

しかし、それ以上の言葉が紡がれることはなかった。

「——ううん、やっぱり何でもない」

しばしの間の後、氷川さんは優しい微笑^{びしやう}とともに言ってきた。

「じゃあ、またね。おやすみ、霧島くん」

べこりと頭を下げると、マンションのエントランスへと消えていく氷川さん。

それを見送って、俺は小さく息を吐き出した。

マンションの前にあるベンチに座って、地べたに視線を落とす。

そんなことは絶対ないとわかつているけれども……でも、告白されるかと思った。それぐらい、氷川さんの表情は恋する乙女のような表情をしていて。そして、そうではなかったことを残念に思っている自分に気づいていた。理由はわかっている。

本心を言うなら、そう、俺はこのまま氷川さんとの関係をずっと続けてたくて。もつと一緒に色んなところに行きたくて。他の誰にも渡したくなくて。つまり、

「……好きです、氷川さん」

誰もいないからか、その言葉は自分でもびっくりするほどすると零れ出た。でも、それは、どうしようもない俺自身の気持ちだった。

趣味が合って、とっても優しく。

それだけじゃなくて、あんなに綺麗で可愛い先輩で。

——あの、もしよかつたらでいいんだけど。その、一緒に行かない？　それが、霧島くんから私へのお礼ということ……

——な、なんか照れるね。さっきまでお喋りをしてたはずなのに緊張しちゃって……

——それは、駄目。風邪を引いちゃったら、どうするの？

そんな女の子を好きにならないわけがなかった。

自分でもそう確信してしまうほど、俺はもう氷川さんのことが——

「……ほんと、霧島くん？」

俺の名前を呼ぶ声が、さっきまで言葉を交わしていた女の子の声が、響く。

弾かれたように、顔を上げる。

目の前。——そこには、帰宅したはずの氷川さんが何故か立っていた。

◇ ◇ ◇

「あ、えっ、ちよっ、いや、なんで——」

ちよっと待ったちよっと待ったちよっと待った！

なんで、氷川さんがここに——いや、その前に聞かれていたのか、さっきの!?

混乱しすぎて、目の前の状況が処理できない。

氷川さんはしきりに髪の毛の先を弄りながら、

「……え、えーっと、マンションから霧島くんがベンチに座ってるのが見えたから……だ

から、その、戻ってきちゃったんだけど……」

言って、氷川さんは顔を真っ赤にしながら上目遣いで問うてくる。

「……その、さつき、霧島くんが言ってたこと……ほんと……？」

「い、いや、さつきのほ、違——」

う、と言いかけて、俺は思い止まった。

違う、と言うのは簡単だ。

だけれど、それは仮にも氷川さんの前でこの恋心を否定してしまうわけ。

少なくとも、俺は氷川さんの前でそんなことはしたくなかった。

「はい、本当です」

氷川さんの目を真っ直ぐに見つめて、俺は言う。

馬鹿みたいに激しく鼓動する。頭が真っ白になる。今すぐ、ここから逃げだしたい衝動

に駆られる。

だけど、そうはしなかった。

「好きです、氷川さん」

繰り返す。退路を塞ぐように。自分の気持ちを確認するように。

木乃葉には「どうせ駆け引きなんてできないんだから、馬鹿みたいに告白すればいい」

と言われたが、その通りだ。

俺には駆け引きなんてできない。気の利いた言葉なんて言えない。

だから、馬鹿みたいに、愚直に、彼女への想いを口にする。

少しでも、彼女にこの想いが伝わってくればと願いながら。

「だから、俺と付き合ってください」

声は震え、手汗でびっしょりで、足はがくがくと揺れていたが、俺はそれでも何とか言

い切った。

それ以降の時間は、生殺与奪を握られた気分だった。

またもに、氷川さんの目が見られない。

とても不安で押し潰されそうになって、自然と呼吸が早くなる。

それでも、結末を見届けるために、俺は顔をあげて。

~~~~~

氷川さんは唇をもにやもにやとさせながらも、頬を紅潮させて立っていた。

「あ、あの、ちょ、ちょっと待ってね」

そう言って、くるりと反転して背を向けてしまう氷川さん。

え、どうしたんだ？ こ、これはどういうことだ？

バクバクと心臓を鳴らしながらも見守っていると、氷川さんは背中を見せたまま、「ひっふー」と繰り返して呼吸する。……いや、本当にどういふことなんだろう。

そうして、しばしの間の後。

彼女がこちらを向く。すると――

煌めくような月夜のもと。

氷川さんとはびつきの笑顔を浮かべていて。

「霧島くん」

思わず見惚れていると、彼女が優しい声音で呼びかけてくる。

視線が絡み合う。

氷川さんは桜色の唇を動かして、そっと、綺麗な音を奏でる。

今まで見てきたなかで一番の素敵な笑顔とともに。

「私も霧島くんのが好きです」

「――これから、よろしくね」

高校一年生の春休み。

こうして、俺と氷川さんは恋人になった。



一週間後。

春休みが明けた四月。

慶花町の街を歩きながら、俺は慶花高校へと続く長い坂を登っていた。

傾斜は大きく、春だというのに大粒の汗が額につくられるほどの重労働。ほんと、この坂を登るたびに、なんでこの高校に行くことを決めたんだろうなあって思う。

今日から、新学年――つまり、俺は高校二年生だ。

先日、入学式もあったようだが、新入生らしき生徒も散見される。なんでわかるかというと、この坂を歩き慣れていない感じが表情に出てくるから。途中で何度も足を止めてる姿を見ると、なんだか応援したくなってしまう。

それとは別で、高校生に交じって私服の若者の姿もちらほらと見える。

これは、慶花高校が大学と同じ敷地内に建てられているせいだ。といっても、高校は正門のすぐ近くにあるが、大学の建物は正門から歩いて十分もかかる。実質、別の場所と言っても過言じゃない。

「っ」

心地よい春の風が、髪を撫でる。

空を仰ぐと、雲一つない蒼穹が広がっていた。

それは、まるで俺たちのことを祝福しているみたいで。

いやー、それにしても、俺もついに彼女持ちでリア充かー。

まあ？ 最初に、才能うんぬんの話をした気もするけれど？ そういう意味では、俺に

はそっちの才能があつたっていうか？

ほんと、困っちゃうなー。

才能に溢れてて、俺、やっぱえわー。

「……あの、拓也さん。なんで、一人でニヤニヤ笑ってるんですか？ キモいですよ」

その声に、バツと横を向く。

すると、木乃葉がドン引きしたような表情で立っていた。視線がゴミを見るそれと何も変わらない。

木乃葉は大袈裟に身を引きながら。

「拓也さん目が怖いんですから、往来でそんな顔しちゃ駄目ですよ。他の人が怖がるじゃないですか」

「いや、そんなこと言われてもさ」

「下手すりゃ、犯罪ですよ」

「俺、笑ってるだけなのに!？」

そんな気持ち悪い顔してたの、俺!？」

確かに、浮かれてはいたけどさ。……そこまで言わなくていいじゃねーか。

しかし、口に出すと余計に言われそうなので、俺は取り敢えず疑問に思っていたことを訊ねる。

「ところで、さ。なんでお前ここにいるの？ こっち高校だぞ？」

お前、中学生じゃん。

不思議そうに見ていると、木乃葉は不満そうに頬をぷくつと膨らませる。

「はあー！ 私、この間言ったじゃないですか！ 同じ高校に入学したから、一緒だって！ 驚かせるために直前に言ったのに、忘れるとか全然意味ないじゃないですか!？」

「悪い悪い。ここ最近、それどころじゃなかったからな。そういや、そうだったっけ」

「拓也さんなんてどうでもいいですけど、忘れられたらそれはそれで何かムカつく！ 猛省してください！ そして、私の鞆を持って！」

「いや、鞆関係ねえだろ」

「なんで、俺に鞆をぐいぐいと押しつけてくるんだよ。」

「そんなことされても持たないからな、お前の鞆。」

「いや、私、昨日、夜遅くまで撮り溜めていたドラマ見てたんですよ。で、寝不足でめちゃ疲れてて」

「はあ」

「だから、持ってくださいっ！ お願ひ、拓也先輩♡」

「知るか、そんなお前のくだらない事情」

「えー、いいじゃないですかー。ほら、今なら、可愛い後輩の制服姿を好きだけ見てもいいんですよ？」

「そう言いながら、その場で制服を見せるようにくると一回転する木乃葉。」

「はいはい、可愛い可愛い。良かったな、木乃葉」

「……え、なんか、反応雑じゃありません？ おつかしいな。拓也さんなら、ちよつと甘えれば簡単に騙せると思ったのに……」

「お前の中で、俺ってどういうイメージなんだよ……」

「そんなに、チョロいって認識されてんの？」

「……で、例の先輩の件どうなったんですか？」

「一応、木乃葉なりに氣遣ってくれているのか、ぼしぼしと小声で話しかけてくる。」

「この辺の切り替えの速さは、長年の付き合いの賜といふべきか。」

「俺がこれまであったことを全て話し終えると、木乃葉は何故か固まった。」

「次いで、木乃葉は呟くように小声で。」

「……え、マジで告白したんですか？ あの拓也さんが？ マジですか？」

「どういう意味だよ！ そ、そもそも、お前が告白した方がいいって言ったんだろ！」

「言いましたけどー。でも、だって、拓也さんなら結局チキっちゃうかなーとか思っうじやないですか？」

「言いたいことはわかるけどさ」

「お前、何気に俺に失礼じゃない？」

「でも、拓也さん、告白上手くいって良かったですね。拓也さんのことを好きな女性がいるとか、未だに信じられませんけど。世の中、物好きな女性もいるんですね」

「お前、笑顔でまあまあ酷いこと言うよね」

「ちなみに、そのひと、どこのお店のキャストさんなんですか？」

「レンタル彼女とかじゃないからな！」

結局、お前、微塵も信じてねえじゃねーか！

本当の本当なんだけどなあ……氷川さんと次会ったときにはぜひ写真を撮って、こいつに見せつけてやりたい。

そのときには、チエキとか言われそうだけど。

「あ、そろそろ学校なんで先に行きますね。拓也さんと一緒に歩いてて、初日から変な噂を流されても嫌ですし」

そう言うや否や、木乃葉はパタパタと先に駆けていく。

忙しいやつだ。この坂を走って登るのも楽じゃないだろうに。

しかし、木乃葉は数歩先で立ち止まると、チラッと振り返って。

「あつ、言うの忘れてた」

「——拓也さん、おめでとうございます」

からかうような、それでいて優しい笑み。

最後にべーっと馬鹿にするように小さく舌を出すと、木乃葉は今度こそ振り返らずに校門へと入っていった。



俺が事前に告知されていた新しい教室に入ると、一瞬だけその場が静まりかえった。怯えているような、この一年間を諦観するような雰囲気。

この空気には、いつまで経っても慣れない。

ああ、早く終わってくれないかなあ……などと思っていると、本当にすぐに終わった。

……ん？ どうしたんだ？ 何かあったのか？

聞き耳を立てていると、ちらほらと似通った会話が聞こえてくる。

「なあ、聞いたか？ 俺たちのクラスの担任、あの〈雪姫〉らしいぜ」「マジで？ 最悪

じゃん。美人だけど、あの先生超怖いしさ……」「それに、〈雪姫〉って授業も超厳しいんだろ？ 俺たちついていけないのか？」などなど……全てが〈雪姫〉の話題。

げっ、マジかよ。

今年一年、雪姫が担任とか最悪じゃねーか。

こんな見た目だし、絶対に目をつけられるよな……はあ、先生替わってくんねーかな。これから憂鬱になりそうな一年を想像して、俺は思わず嘆いて。そんな高校二年生なら、始まらなくていいとすら思っていた。その瞬間までは。

俺が机に突っ伏していると、突如、扉がガラツと聞く音が響いた。

「ホームルームの時間です。皆さん、席に座ってください」

若い女性の声。

途端に、クラス中が落胆にも思える息を吐き出す。

その反応に、俺も顔を上げて。

「――」

俺は、息を呑んだ。

俺にとって、雪姫は遠い存在だった。

担当する学年も違う。俺が雪姫を見るのはいつだって全校集会などのときだけで。俺の記憶の中の彼女は、いつも遠い壇上に立っていた。

だからか、彼女の顔は美人という印象はあったが――正確には把握はしていなくて。初めて間近で見たときに、俺はこう思ってしまった。

――俺の知っている女性に似てる、と。

綺麗さと可愛さの両方を兼ね備えた顔立ち。

動きやすいように一つにまとめられた黒髪。

鋭い眼光。

黒縁の眼鏡。

若手の先生らしく、その格好は黒のスーツで。

厳しさと真面目な雰囲気兼ね備えていて。

「皆さん初めまして。私が、皆さんの担任の教師となりました――」

黒板に名前を書きながら、凜、と澄んだ声を教室中に響かせる。

あれだけ騒がしかった教室が一気に静かになり、注目がその先生に集められる。そうして。

教室中に走らせていた、雪姫の視線が俺にぶつかった途端。

「……………えっ？」

厳しく引き締められた表情が、啞然としたあどけないそれへと変わった。  
からん、と手に持っていたチョークが落ちて碎け散る。

クラスメイトがざわざわと小さく騒ぐが、雪姫はぽかんと口を開けたままだった。  
何故かはわからない。

だが、黒板に書かれた文字を見た瞬間、胸がどくと跳ねた。

はっ？　なんだ、これ？

ただの偶然なのか？

黒板の文字には、こう書いてあった。

——氷川真白、と。

それは、奇しくも、俺が好きになって告白したあの氷川さんと全く同じ名前だった。





続きは、

9月20日発売のファンタジア文庫で！

©Yu Shinomiya, Nishizawa5mm 2019